

# ひょうごの遺跡

兵庫県埋蔵  
文化財情報

49号

平成15年12月22日発行

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652-0032

神戸市兵庫区荒田町 2-1-5

TEL 078 (531) 7011/FAX 078 (531) 7014

ホームページアドレス

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~maibun-bo/>

## 珉平焼の窯跡を発掘

近世・近代窯業の解明にせまる



発見されたコーカシ窯



出土した陶磁器類



出土した陶磁器類  
(洋食器 素焼き)

国生み神話と渦潮の町、淡路島南端の三原郡南淡  
町において、珉平焼窯跡の発掘調査を行いました。

調査では、明治時代末から大正時代に操業していたと考えられるコーカシ窯（乾燥窯）やそれを取りまく石垣や排水路などを発見しています。

コーカシ窯は、国内に現存するものが認められず、発掘調査によって発見されたのも今回が初めてのことです。大量の出土品とあわせ、近世・近代窯業の実態にせまる大きな成果が得られました。



出土した窯道具



## 珉平焼 とは…

珉平焼は、江戸時代後期の文政年間（1818～1830）に三原郡伊賀野村（現、南淡町伊賀野）で賀集珉平（1796～1871）が創業した京風の流れを汲むやきものです。

伊賀野村の庄屋に生まれ、淡路島の産業の乏しさを憂いていた珉平は、京焼の陶工尾形周平（初代）と出会い、池の内村（現 洲本市城戸）での白土の発見などをきっかけに製陶業を始めました。和物の仁清写彩色や錆焼から当時流行の中国系の青花磁・絵高麗・白高麗・青磁・赤絵・紫泥・白泥、象嵌焼、朝鮮模製、按南・交趾模製、ヨーロッパ系の紅毛彩色など多種多様な焼成を手がけ、品種も茶器・酒器・花器・置物・その他の日常雑器にまで広くおよんでいます。

天保10（1839）年にはその生産額が淡路国産物の首位を占めるようになり、阿波藩（現 徳島県）第14代藩主の蜂須賀斉昌公から御庭焼を焼く栄誉を担い、「御用御陶器師」の称と「勝瑞」の名を与えられました。

珉平没後は、甥の三平、さらに珉平の子力太から淡陶社（明治26年には日本郵船に次いで日本で2番目の株式会社「淡陶株式会社」）へと陶器生産は引き継がれ、明治・大正年間にはアメリカ・イギリス・中国・東南アジアなど海外へと輸出されました。また、明治中頃には日本初の内装用の多彩色画によるマジョリカタイルも生産され、現在は世界有数のタイル生産会社「ダントー株式会社」へとその技術が継承されています。

## 珉平焼と海老茶碗

多種多様なやきものを創作した珉平焼の中でも代表的なものとして、海老茶碗が広く知られています。三平・淡陶社の時代にも優れた海老茶碗は数多くつくられましたが、「珉平の海老は衝立風に、しかも一気呵成に描かれた感じで、その運筆のうまさに感心させられる」と5代尾形周平氏が評されているように、非常に生き活きと躍動的に描かれ、おめでたい茶碗として正月にはことに喜ばれ、人気を集めました。



珉平作 海老茶碗（個人蔵）



## 発掘された100年前の遺跡

今回の調査では、谷の底地に周囲の斜面から削り取った土を敷いて整地された東西約15m、南北約15mの作業場跡が発見されました。作業場の東側には陶磁器投棄層の崩落を防ぐために高さ約2mの石垣が築かれ、南北の斜面裾にも2～3段の石組列が配されていました。さらに、これらの石垣（組）に沿って幅約0.5mの排水路がめぐり、北東隅には明治40年代から大正時代に操業していたと考えられるコーカシ窯（乾燥窯）が発見されました。このうち、コーカシ窯は東西約2.5m、南北約3.4m、高さ約2mを測るレンガ積みの方形窯で、厚さ約3mのコークス混じりの陶磁器投棄層下にほぼ完全な形で残存していました。



調査区の全景



調査風景



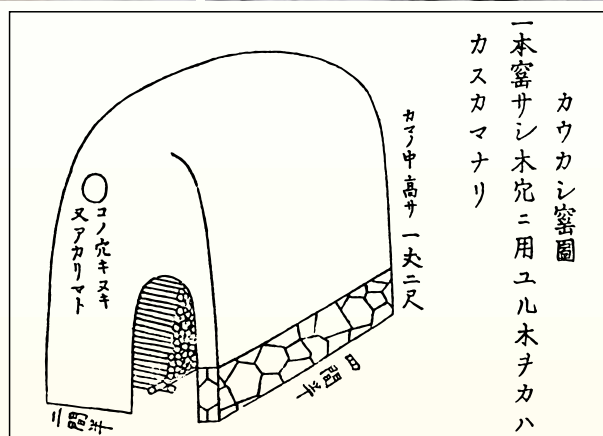
土層断面の剥ぎ取り風景

作業場跡の下層と石垣の背後からは大量の遺物が出土しました。石垣背後の掘り下げを進めたところ、陶磁器投棄層の堆積は調査区の東壁で約7mの厚さにもおよんでいました。この遺物堆積層には、製品の失敗品だけでなく、不用になった窯道具なども含まれ、操業期間中の製品の種類・製陶技術・生産規模などを窺い知ることができる江戸時代から大正時代に至る近世・近代窯業の歴史を示す貴重な資料といえます。このため、調査の最後には幅約1m、高さ約7mの範囲にわたって土層断面の剥ぎ取り作業を行いました。

# コーカシ窯



コーカシ窯は、薪を乾燥させるための窯で、皮を剥いた松を窯の中に積み上げ、松葉を焚いて燻し焼きにして乾燥させる窯であったといわれています。文政13（1830）年に<sup>きんこどうかめすけ</sup>欽古堂亀祐によって著された<sup>とうきしなん</sup>『陶器指南』に解説図が掲載されており、その存在は江戸時代後期までさかのぼり、有田地方（佐賀県）では大正時代初年（1912）頃までどこの窯場にもあったといわれていました。しかし、その後使用されなくなり、現存するものは現時点では確認されていない状況です。また、発掘調査で発見されたことも今回が初めてであり、日本で唯一現存するコーカシ窯の可能性が高い、貴重な歴史遺産のひとつと考えられます。賀集家に伝わる『陶器用諸機械調査記録』（明治12年）には、「焦竈式ツ」と記されており、「こがしかま」と呼んでいたようです。



『欽古堂亀祐 陶器指南』のコーカシ窯解説図

小野賢一郎編 『陶器全集』 陶器全集刊行會 昭和8年

この貴重な窯は、地元南淡町内に移築復元する計画が進められており、多くの人々に見ていただける展示を目指しています。



## 出土した多種多様な遺物

今回の珉平焼窯跡の発掘調査では、約1,000箱におよぶ大量の遺物が出土しました。大半の遺物は発見されたコーカシ窯より少し前の時期である明治20年代から窯の操業期間を経て、大正・昭和初期に至るおよそ50

年の間に投棄されたもので、陶磁器類や製品を大量に生産するための文様型・窯道具・内装用壁タイル・花留<sup>はなどめ</sup>など多種多様なものがみられます。

珉平焼の創業者である賀集珉平が製陶に携わった江戸時代後期から幕末（1830年頃～1870年頃）にかけての遺物は、染付や青磁・色絵などがわずかですが出土しています。

『日本近世窯業史』（大正5年）には「當地に於ては、締焼窯と釉焼窯とを併用する」と記載されていますが、珉平の活動期の窯や工房がどこにあったかは明らかではありません。珉平自身が藩の許可を得て、白石山（発掘現場の北西）の中腹に造営した陶業守護の陶器神社の位置や、発掘調査でこの時期の遺物が出土した状況などから、珉平時代の窯や工房は、調査区下方の谷の入り口付近（ダントー株式会社敷地内）に存在していた可能性が高いと考えられます。



江戸時代後期から幕末・明治時代初頭の遺物

今回の調査で出土した遺物には、刻印が捺されたものや年号が記されたものなどが多数発見されています。刻印にはこれまで確認されていない三平印（「大日本アハシ三平」）や淡陶社設立時（明治16年頃）以降の珉平印（珉平が捺していた印と区別するために「平」のたて棒の下を横に振った「振り平」印）、淡陶社の商標である「千鳥」印数種、さらに海外へ輸出するための「JAPAN」印数種など多くの刻印がみられます。また、文様型に書かれた年号は、明治20年代と40年代を中心としたもので、刻印とともにコーカシ窯などの遺構の年代を考える上での貴重な手がかりとなります。



各種刻印



年号入り文様型



龍文小判皿の文様型とその製品

遺物はこの他にも、窯道具や内装用壁タイル・花留などが出土しています。窯道具には、焼成時に製品を保護し、窯内に数多く積み上げて詰め込むための耐火製容器である「サヤ」、焼台の一種である「ハマ」（器物の下に敷く台）数種、ハマを支える円柱

形の「ヌケ」、釉薬などを摺って細かくするための容器と棒である「乳鉢」・「乳棒」、赤や橙色の釉薬がこびりついた容器など、当時の窯業形態を窺い知ることができるさまざまなものが出土しました。

（表紙の写真）

淡陶株式会社は、明治34（1901）年に輸入タイルと同レベルの日本初の内装用多彩色画によるマジョリカタイルを完成させ、生産を始めました。このタイルは「湿式タイル」とも呼ばれ、粉碎した原石を粘土と調合し、水を加え、よく練り混ぜて型押し成形するもので、今回の調査では、多彩で多様なタイルとその文様型も出土しました。明治41（1909）年には、さらに技術改良が行われ、高圧で圧縮成形する「乾式タイル」の生産が可能となりました。乾式タイルの表面にも湿式タイルと同様に多彩で多様な文様が描かれていますが、裏面には「大日本 商標 淡陶會社」や「DK」など数種類の社印を確認することができます。

この他、海外輸出品として、鯉や亀・蛙などを模った花留も出土しています。



湿式・乾式タイル



花留



湿式タイルとその文様型



乾式タイルの裏面「千鳥」

## まとめ

珉平焼窯跡の調査の概要を紹介してきましたが（当埋蔵文化財調査事務所が開設するホームページには発掘調査の状況を記録した「週刊珉平」を掲載しています）、発掘調査は終了したばかりで、出土遺物については、水洗い作業が全体の約30%が終了しているに過ぎません。このため、遺物の全容については今後、水洗い作業や遺物の分類作業などが行われていくことでより詳しく研究が進んでいくものと思われます。

江戸時代後期に各藩で殖産興業の一環として行われたやきものの多くは、幕末の動乱期に消え、明治時代以降も生産が継続するのはごく一部の窯に限ら

れていました。珉平焼はその数少ないうちのひとつであり、藩の御用窯と日常雑器生産、さらには輸出陶磁器生産からタイル生産へと近世・近代陶磁器産業の流れがその製品に凝縮されています。今回の調査で出土した大量の遺物には、その様相を具体的に認めることができるとともに、全国各地の近世あるいは近代遺跡から出土している珉平焼の同定と時期決定を行う上で極めて重要な資料を得たともいえます。

田園風景が一带に広がる淡路島南端に創設された淡陶社の時代からダントー株式会社へと社名が変更した現在も、その技術や精神は賀集珉平が創業した珉平焼を源流として引き継がれています。

地域文化財展  
2003

# 邪馬台国への道のり

開催報告  
I

今年度も、県立考古博物館（仮称）先行ソフト事業として、西播磨の揖保郡新宮町立町民スポーツセンターや町立総合福祉会館ほかを会場に、11月1日から16日の16日間にわたり『邪馬台国への道のり』のテーマで、地域文化財展を開催しました。

今回は新宮町教育委員会とで主催し、西播磨地域の市町教育委員会及び大手前大学史学研究所等に共催いただきました。内容は「地域文化財展」・「歴史体験イベント」・

「歴史ウォーク」・「地域文化財講座」・「シンポジウム」の五部構成となっています。

また、地域住民の方に「文化財ボランティア」として企画・運営に参画いただけるよう、事前学習を兼ねた「文化財ボランティア養成講座」も開講しました。

ここに、二回に分けてその内容の一部を報告させていただくとともに、参加者並びにご協力いただいた方々にあらためてお礼を申し上げます。

## 地域文化財展

新宮町新宮宮内遺跡の弥生土器や御津町権現山51号墳の三角縁神獣鏡をはじめ、西播磨各地から発見された土器・石器・鉄製品・青銅器などを主に、弥生時代中期から古墳時代初頭までの出土品を集めました。

そして、西播磨地域においての国家形成期の動きをメインに据え、「プロローグ邪馬台国時代への招待、

新宮宮内遺跡 - 弥生の村 - 、倭国大乱 - 拠点集落の盛衰 - 、まつり - 銅鐸から銅鏡へ - 、

墳墓 - 王墓の出現 - 、エピローグ前方後円墳の時代へ」に構成し、併せて各テーマの展示・理解の補助となるパネルを兵庫県下の代表的な遺跡から選び、展示してみました。

例えば、のテーマの一つ銅鐸の廃棄・破壊では千種町岩野辺遺跡の銅鐸片と安富町谷山遺跡の青銅器を改変したペンダントとともに、日高町久田谷破碎銅鐸のパネルを並べました。さらに、のテーマの弥生中期から後期にかけて集落の盛衰には、石器から鉄器への転換がスムーズに行なわれたかを見るために、石器・鉄器だけでなく各地の搬入土器も取り上げました。

最近発見の御津町綾部山39号墳を見るまでもなく、西播磨の地域が河内とともに吉備・讃岐・阿波・出雲とも交流があったことを認識していただけたと思います。なお、延べ入館者数は約1,700名でした。

西播磨各地から参加していただいた「文化財ボランティア」の方々には、本当にお世話になりました。







## 弥生フェスタ

歴史体験イベントは11月2・3日の二日間、新宮宮内遺跡を会場に実施しました。

第一期考古楽者の考古博物館支援ボランティア修了者による考古楽倶楽部のメンバーを中心に、県教育委員会と新宮町教育委員会の埋蔵文化財担当職員および新宮宮内遺跡調査団を含め、分銅形土製品やろう鐸作りなど七つのブースを出店しました。

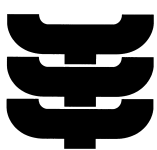
それぞれのブースでは、今回のフェスタ用に簡単コースを設けるなど工夫してみました。当日は、子供が多かったせいか勾玉作りが一番の人気です。220余名の参加者の皆さん、雨混じりの天候にも係わらず集まっていたいただき、ありがとうございました。



## 歴史ウォーク

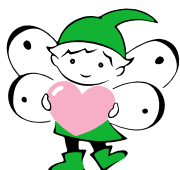
11月9日には、国指定史跡新宮宮内遺跡周辺の史跡巡りを行いました。

この日もあいにく天気が悪く、予定していた国指定史跡吉島古墳には登ることが出来ませんでした。それでも、新宮町歴史民俗資料館から県指定史跡天神山古墳や西播磨文化会館西方の宮内古墳群を廻り、さらに国指定重要文化財の宮内天満神社を見学できるなど非常に有意義な一日となりました。黄泉の国とされる横穴式石室の世界は、いかがでしたか。



文化財愛護シンボルマーク

15教©2-022A4



(愛称:ココロシ)  
"こころ豊かな美しい兵庫"をめざして

編

集

後

記

事務所のメイン事業である地域文化財展が無事終了し、ホッとしたいらもう師走です。年齢とともに、一年が早く過ぎていきます。

本号は、夏の発掘調査で注目された淡路・埴平焼を特集してみました。

兵庫文化の特徴の一つに、古代以来の焼物の産地（窯跡）がたくさん存在したことが挙げられます。近世陶器の華やかで美しい色合いを、お楽しみください。（S.O）